

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 22 日現在

機関番号：12701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2014

課題番号：22730535

研究課題名(和文)「知能検査デジタルアーカイブ」の構築

研究課題名(英文) the digital archive of Japanese intelligence test

研究代表者

鈴木 朋子 (SUZUKI, Tomoko)

横浜国立大学・教育人間科学部・准教授

研究者番号：60422581

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：日本における知能検査の歴史を、開発者と使用者の視点から検討することと、歴史的な知能検査用具等の資料を用いた知能検査デジタルアーカイブを構築することを目的として研究を行った。研究では、学問領域を越えた知能検査資料の収集と特徴分析、知能検査開発者への面接調査に基づくオーラルヒストリーの収集と分析、学術誌「心理研究」を対象とした知能検査の出現件数の調査を行った。成果は学会発表、論文にて公表を行った。なお、知能検査デジタルアーカイブは、心理臨床における倫理的な課題があるため、公開準備中の段階である。

研究成果の概要(英文)：The purposes of this study are to describe a history of Japanese intelligence test through oral history with test developers and to establish the digital archive of Japanese intelligence test. In the first part, this study analyzed particulars of Japanese intelligence tests which developed in the psychological discipline and in the medical discipline. In the second part, the oral history project with developers of Japanese intelligence test were conducted. In the third part, the frequency of appearance of intelligence test in academic journal "Sinri-Kenkyu" was investigated. The results of this study was reported in journals and conferences. However, internet publication of digital archive of Japanese intelligence test is in preparation because of some ethic difficulties.

研究分野：臨床心理学

キーワード：心理学史 知能検査 オーラルヒストリー WAIS HDS-R 田中ビネー 鈴木ビネー デジタルアーカイブ

1. 研究開始当初の背景

(1)概要

研究を開始した平成 22 年,日本では 2 万人以上の臨床心理士が心理的援助を提供していたが,ベテランの臨床心理士でさえも,日本における臨床心理学発展の経緯を知らないことが多い状況であった。その原因として,日本の臨床心理学史の研究報告が少なく,未整理な史実が多いことが考えられた。

知能検査は,心理学者の最大の「発明」と考えられており(佐藤・溝口,1997),臨床心理学が独立した学問となる上で重要な役割を果たしてきた。日本の臨床心理学史をまとめる上で,まずは日本における知能検査の歴史を整理し,失われつつある資料を保存することが急務と考えられた。

【研究動向】

海外の知能検査の歴史については,ビネの知能検査開発までの経緯と,その普及について詳説したウルフ著『ビネの生涯 知能検査のはじまり』(1979)があげられる。日本における知能検査史は,佐藤(1997)に簡単な紹介があり,田中(1947),鈴木(2003),中村ら(2003)にビネ・シモン式知能検査日本改訂版の詳細な報告がある。しかし,これらの報告から日本知能検査史の全体像を把握し,日本独自の特色を見出すことは不可能である。

また,知能検査は心理学だけではなく,医学や教育学等の近接領域でも開発・使用されてきたが,他領域での発展は心理学史で扱われてこなかった。近接領域における発展を含めた新たな知能検査史をまとめ,日本における知能検査の特色と臨床心理学的援助の独自性を見出す必要があると考えられた。

報告されてきた知能検査史の研究方法は文献研究が中心であった。臨床実践の中で発展したにもかかわらず,検査の開発や使用に従事した者によるオーラルヒストリーを収集し分析した研究は見られず,また,知能検査の使用状況の調査等,使用者の視点からの史実の整理は行われていない。

研究代表者は,ビネ・シモン式知能検査を日本へ導入した人物として久保良英と三田谷啓に着目し,論考をまとめる過程で(鈴木,2003,鈴木ら,2009),医師三田谷啓が日本初の知能検査セットを発売したにもかかわらず,三田谷の業績は心理学史の文脈で論じられなかったことを見出した。知能検査用具は,古いものほど災害で失われており,入手は困難を極める。特に日本導入期(大正期)の知能検査は,知能検査史を

論じる上でも臨床心理学のルーツを知る上でも重要な役割を果たすものの,利用可能な形で保存されていない。

2. 研究の目的

本研究の目的は,以下の2つであった。

- (1)日本知能検査史を開発者と使用者の2つの視点から検討すること。特に,開発者については,オーラルヒストリーを用いて資料を集めること。
- (2)歴史的な知能検査用具や手引き,検査記録用紙を画像データ化し,知能検査デジタルアーカイブを構築すること。

3. 研究の方法

研究は以下の3つの方法により行った。

- (1)知能検査の用具・手引き等の資料収集と特徴分析
学問領域を越えた知能検査資料を収集し,特徴を分析した。デジタルアーカイブの資料として用いる準備を行い,保存した。
- (2)知能検査開発者への面接調査によるオーラルヒストリーの収集と分析
知能検査開発者や後継者に面接調査を行い,オーラルヒストリーを収集した。録音した音声は,面接協力者の了承を得てテキストに書き起こし,デジタルアーカイブの資料として用いる準備を行った。
- (3)知能検査の使用状況についての調査
学術誌(「心理研究」)を対象に,知能検査の出現頻度調査を行った。

4. 研究成果

- (1)知能検査の用具・手引き等の資料収集:
入手可能な知能検査セット,知能検査手引き等の資料を国内外から収集し,整理を行った。入手した資料は以下である(部分的な入手も含む)
東京大学医学部附属脳研究室にかかわる知能検査の資料
・1908年,三宅鑛一発表,個別式,チーヘン(1907)等が原版,「智力測定法」,
・1926年,三宅鑛一発表,集団式,アーミーテストが原版,「臨床的知能検査法」,
・1936年,吉益脩夫発表,集団式,式軍隊テスト等が原版,「脳研式知能検査法」,
・1947年,諏訪望発表,集団式,吉益(1936)の改訂,「脳研式標準知能検査」
久保良英の知能検査にかかわる資料
・1918年,久保良英発表,個別式,ビネ・シモン式知能検査1911年版が原版,「小學児童の智能査定の研究」
・1919年,久保良英発表,個別式,久保(1918)の改訂,「改訂せる知能検査法」
・1920年,久保良英発表,集団式,「団体的精神検査」
・1922年,久保良英発表,集団式,National Intelligence Testが原版,「国民知能検査法」
・1922年,久保良英発表,個別式,久保(1919)

の改訂,「増訂智能検査法」
・1923年,久保良英発表,集団式,久保(1922)
「国民智能検査法」の改訂,「団体智能検査法」
・1927年,桐原葆見発表,個別式,久保(1922)
「増訂智能検査法」の改訂,「就學前及び就學時に於ける児童の智能査定」
・1942年,久保良英発表,集団式,ターマンによる「新スタンフォード改定案」L式智能検査 1937年版が原版,「国民学校児童智能査定法」
三田谷啓の智能検査にかかわる資料
・1915年,三田谷啓,個別式,ポーベルターク(1913)が原版,「學齡児童智力検査法」
鈴木ビネー智能検査の資料
・1956年,鈴木治太郎,個別式,ピネ・シモン式智能検査・ターマンによる改訂版が原版,「實際的個別的智能測定法」(鈴木ビネー式智能検査)
・2007年,鈴木ビネー研究会委員(小宮三彌他)発表,個別式,鈴木(1956)の改訂,「改訂版 鈴木ビネー智能検査」
田中ビネー智能検査の資料
・1936年,田中寛一発表,集団式,「田中 B 式智能検査」
・1947年,田中寛一発表,個別式,ターマンによる「新スタンフォード改定案」M 式智能検査 1937年版他が原版,「田中びねー式智能検査法」
・1987年,田中教育研究所発表,個別式,1970年版「新訂版 田研・田中ビネー智能検査法」からの全面改訂,「全訂版 田中ビネー智能検査法」
・2005年,田中教育研究所発表,個別式,田中ビネー「田中ビネーV」
ウェクスラー式智能検査の資料
・1900年,品川不二郎他発表,個別式,「日本版 WAIS - R 成人智能検査法」
2006年,日本版 WAIS - III 刊行委員会,「WAIS - III 成人智能検査法:日本版」
長谷川式簡易智能スケールの資料
・1970年,長谷川和夫発表,個別式,Robinson(1964)が原版,「精神診査スケール」
1974年,長谷川和夫他発表,個別式,「痴呆診査スケール」
・1991年,加藤信司他発表,個別式,「改訂版長谷川式簡易智能評価スケール(HDS-R)」
以上のうち, については,2010年日本心理学会にて「三宅鉦一による智力測定法」としてまとめたほか,2012年日本心理学会にて「脳研式智能検査について」と題し以下の報告を行った。「脳研式智能検査」は,アメリカ 式軍隊テスト,エビングハウスの文章完成法を参考に,精神薄弱者や不就学児童の一斉調査,学童への調査のデータを用いて1939年に考案された。1947年には改訂版としてヒーリーの完成検査を項目に用いた「脳研式標準智能検査」が発表された。これらの検査は,知的障害を持つ者のスクリーニングを目的に,精神科医により作成され医学領域で使用

されたものである。実施や採点,結果の解釈は容易であり,心理学者が作成する智能検査に比べて,診療補助という明確かつ限定された用途に即しているという特徴がある。

の一部を含めた集団式智能検査については,2013年日本心理学会にて「1920年代における集団式智能検査の変遷」と題し以下の報告を行った。1920年発表の久保良英による「団体的精神検査」,1922年発表の久保良英による「国民智能検査法」,1923年発表の渡邊徹他による「国民智能検査」,1926年発表の淡路円次郎他による「軍隊性能検査」の特徴を比較した。検査開発の目的は,小学生の智能調査,職業紹介,人員配置へと変化し,検査対象者は児童から高等教育を受ける学生,一般成人へと拡大した。時代の変化に伴い,社会における智能検査へのニーズが変化し,智能検査の役割が拡大したことがうかがえた。

(2) 智能検査開発者への面接調査によるオーラルヒストリーの収集:

智能検査開発者・後継者に半構造化面接にて面接調査を行い,オーラルヒストリーを収集した。研究協力者(敬称は略す)は,WISC 智能診断検査法・WAIS 成人智能診断検査を改訂した品川不二郎,夫人の品川孝子,田中ビネー智能検査法(1987年版)・田中ビネー智能検査 V を改訂した中村淳子と大川一郎,WAIS - III 成人智能検査を改訂した山中克夫,HDS・HDS-R を開発改訂した長谷川和夫,改訂版鈴木ビネー智能検査を出版した古市龍雄の6名であった。長谷川は医学者,古市は出版社社員で,他は全て心理学者である。

面接調査協力者からは,研究協力者の経歴,研究協力者が従事した智能検査,研究協力者が持つ「知能観」について半構造化面接を行った。この智能検査では,A 知能検査との出会い,B 知能検査に関係する仕事内容,C その仕事を行った動機を中心に語ってもらった。インタビュー形式は,個別またはグループインタビューであり,所要時間は1時間半から2時間だった。

論文として発表したほか(鈴木・溝口,2015;溝口・鈴木,2014)2014年に日本心理学会にて「検査開発者の視点による日本の智能検査史」と題して,オーラルヒストリーを概観し以下の考察を行った。

研究協力者達は,師事した学者が智能検査を研究していたから,上司に指示を受けたからなどの偶然の経緯で智能検査の仕事に携わった。各検査の標準化作業の変遷を見ると,前例がなかったHDSでは開発者が試作と試行を行い,米国の検査の輸入であったWISCでは学生の協力で翻訳した項目を標準化した。だが版が重なるにつれて,開発者はチームを組み組織的に標準化作業を行うようになり,訓練を受けた標準化検査者を用いるようになった。初版では原版的翻訳に留まっていたが,改訂されるにつれて日本の文化にあった独

自の項目が提案され追加された。知能検査の改訂を続けるには、開発者の組織化及び改訂手法の継承が必要と考えられた。

(3) 学術雑誌における知能検査の出現頻度調査：

雑誌「心理研究」の創刊号から戦前まで、知能検査の出現頻度の調査を行った。知能検査は、検査形態別、検査名別に整理し、年代ごとに用いられた検査を検討し、2013年 ESHS にて 'Intelligence tests during wartime Japan.' と題して以下の発表を行った。海外で開発された知能検査の出現件数を図1-1に、日本の知能検査の出現件数を図1-2に示す。

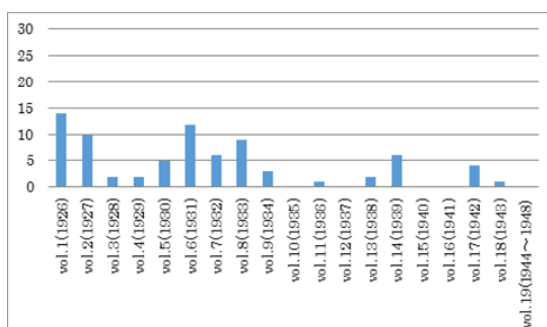


図 1-1 戦前の「心理研究」における海外の知能検査の出現件数

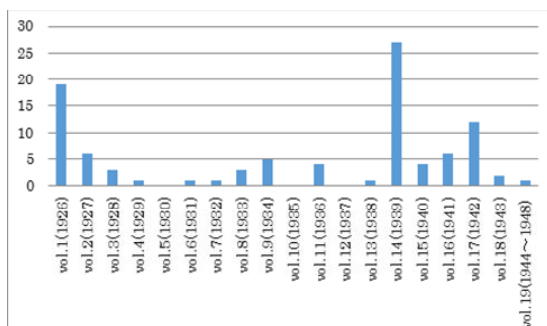


図 1-2 戦前の「心理研究」における日本の知能検査の出現件数

雑誌「心理研究」における海外の知能検査の出現件数は、創刊直後に多く出現し、徐々に減少している。特に1936年以後の検査は、ビネ・シモン式や、スタンフォード式ビネーなどの既出の検査であり、新しい検査の紹介はない。日本の知能検査の出現件数は、雑誌が創刊された1926年と1940年に増加している。1926年に多く紹介された検査はアーミーを原稿とした国民軍隊検査である。1940年に多く紹介された検査は田中B式などの非言語性の検査であり、民族の優秀性など心理学者による戦争協力の目的を伴うものであった。

(4) 日本における知能検査史

日本における知能検査の歴史について、2012年 ICP にて 'The development of the

Binet-Simon intelligence test in Japan.' と題して以下の発表を行った。文献研究と知能検査開発者へのオーラルヒストリーに基づき、日本におけるビネ・シモン式知能検査の歴史を三期に分けて概説した。第1期「ビネ・シモン式知能検査の導入期」(1905年~1915年)は、精神医学者、教育学者、心理学者が個別の目的でビネ・シモン式知能検査を紹介した時期である。第2期「ビネ・シモン式知能検査の実用化」(1915年~1929年)は、知能検査マニュアルや知能検査用具が発売され、検査の標準化が行われ、教育者が使用者となった時期である。第3期「ビネ・シモン式知能検査の日本化と継承」(1930年~)は、鈴木ビネー、田中ビネーなどの知能検査で、改訂作業が継承され、日本オリジナルの項目が作成され、多様な領域で使用されるようになった時期である。

以上の成果を含めたデジタルアーカイブを、インターネット上で公開する準備を行っている。ただし、知能検査にかかわる情報の公開には、心理臨床に関する倫理的な課題があるため、公開は部分的になる予定である。

< 引用文献 >

溝口元, 鈴木朋子, 認知症の早期発見: 「長谷川式簡易知能評価スケール」誕生の史的背景, 査読有, 立正社会福祉研究, Vol.16, No.1, 2014, pp21-30

中村淳子, 大川一郎 2003 田中ビネー知能検査開発の歴史 立命館人間科学研究 Vol.6 pp.93-111

佐藤達哉 1997 知能指数 講談社

佐藤達哉・溝口元(編著) 1997 通史日本の心理学 北大路書房

鈴木朋子 2003 久保良英によるビネー式知能検査の改訂 心理学史・心理学論 Vol.5 pp.1-13

鈴木朋子, 岡村宏美, 木下利彦 2009 三田谷啓によるビネ式知能検査の改訂 心理学史・心理学論 Vol.10/11 pp.1-10

鈴木朋子, 溝口元, 心理学から見た長谷川式認知簡易スケールの特徴: 長谷川和夫へのインタビューから, 査読無, 横浜国立大学教育人間科学部紀要 人文科学, Vol.17, 2014, pp.11-27

田中寛一 1947 田中・びねー式知能検査法 世界社

ウルフ, T.H. 宇津木保(訳) 1979 ビネの生涯 知能検査のはじまり 誠信

書房(Wolf,T.H. 1973 Alfred Binet, The University of Chicago)

5. 主な発表論文等

(研究代表者,研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

鈴木朋子, 溝口元, 心理学から見た長谷川式認知簡易スケールの特徴:長谷川和夫へのインタビューから,査読無,横浜国立大学教育人間科学部紀要 人文科学,Vol.17, 2014, pp.11-27

溝口元,鈴木朋子,認知症の早期発見:「長谷川式簡易知能評価スケール」誕生の史的背景,査読有,立正社会福祉研究,Vol.16, No.1, 2014, pp21-30

〔学会発表〕(計 6 件)

鈴木朋子,検査開発者の視点による日本の知能検査史 2014.9. 日本心理学会(第78回大会発表論文集),同志社大学,京都(京都)

鈴木朋子,1920年代における集団式知能検査の変遷 2013.9. 日本心理学会(第77回大会発表論文集),札幌コンベンションセンター/札幌市産業振興センター,北海道(札幌)

Tomoko Suzuki, Intelligence Tests during Wartime Japan. 2013.7. ESHHS Conference 2013, Würzburg, Germany

鈴木朋子,脳研式知能検査について 2012.9. 日本心理学会(第76回大会発表論文集),専修大学,神奈川(川崎)

Tomoko Suzuki, Hazime Mizoguchi The Development of the Binet-Simon Intelligence Test in Japan.2012.7. XXX International Congress of Psychology, Capetown, South Africa

鈴木朋子,三宅鉦一による智力測定法 2010.9. 日本心理学会(第74回大会発表論文集),大阪大学,大阪(吹田)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:

番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

鈴木 朋子 (SUZUKI, Tomoko)

横浜国立大学・教育人間科学部・准教授

研究者番号:60422581

(2)研究分担者

()

研究者番号:

(3)連携研究者

()

研究者番号: